



一般社団法人

日本小児看護学会

Japanese Society of Child Health Nursing

News Letter

日本小児看護学会
第33回学術集会報告第33回学術集会会長 荒木 暁子
(東邦大学看護学部)

2023年7月15日(土)、16日(日)に、第33回学術集会が開催されました。コロナ禍を経て、久しぶりの現地開催を企画した当初は、会場の手配等で苦戦しましたが、パシフィコ横浜での現地開催と併せてオンデマンド配信も実施し、盛会のうちに終えることができました。今回の学術集会には現地・オンデマンドあわせて1,685名の方に参加登録をいただきましたので、アンケートで得られた参加者のみなさまのお声も含めてご報告をいたします。

今回の学術集会では、テーマを「子どもたちの未来を見据え、今やるべきこと」とし、メインプログラムは ①時代の変化を捉えつつ、一人ひとりの子どものこれからを考えるための看護職に限定しない講師の選択、②小児看護に関わる看護職が今後活動するために有益な情報とディスカッションの場を提供する特別企画の開催、を念頭に準備を行いました。会長講演の他に、特別講演、教育講演、シンポジウムをそれぞれ2つずつ企画し、学術集会のテーマを基に、子どもの発達や育つ環境、社会制度などについて、未来を見据えた知見を得られるような様々な分野の講師の方々にご講演をいただきました。また、特別企画では2つのプログラムを企画し、障害児の未来に役立つシーティング理論に関する講演、患者・家族に対するより深い理解・関心を得るための患者会・家族の会との協働セミナーを実施いたしました。これらの企画の意図は参加者のみなさまに十分伝わったようで、終了後アンケートでは「多くの学びを得ることができ、新しい知見を臨床に持ち帰る事ができました」「看護職以外の小児にかかわる方のお話が聞けるととても参考になります」などの感想をいただいております。

一般演題は、口演63件、示説66件をご発表いただきました。どの発表も魅力溢れる内容でテーマ也多岐に渡り、演題の群分けには苦労しましたが、それだけ子どもに関わる看護職の活躍の場が広がっていることを実感する機会にもなりました。やはり、研究発表は学術集会の醍醐味。直接演者に質問したり、情報交換を行ったりしている姿が多く見られ、アンケートでも「今後の実践や研究的思考に役立てそうです」などの感想をいただきました。

テーマセッションは、24件の企画がありました。本学術集会の参加者は57%の方が実践者ということもあり、当日は各所で熱いディスカッション、実践知の共有が行われていました。もちろん、教育や研究に関するテーマセッションもあり、「テーマセッションが豊富で、興味深いものが多くてよかったです」との感想をいただきました。

その他、日本老年看護学会との合同企画や小児看護政策委員会企画の小児看護政策セミナー、協賛企業の共催セミナーといった魅力溢れるプログラムを開催することができ、未来

の子どもたちのために何ができるのかを考えるヒントを得ることができたと思います。

先にもお伝えした通り、本学術集会ではオンデマンド配信も行いました。会期は2023年7月15日から8月20日で、メインプログラムを含む一部のプログラムを配信いたしました。一部コンテンツの先行配信開始日6月28日から8月20日までのログインユーザー数は1,244、総アクセス数は90,113と多くの方にご視聴いただきました。コロナ禍で培われたノウハウによって、当日現地参加が叶わない方々にも有益な情報提供ができる機会となったことを大変うれしく思うとともに、今後もインターネットを利用した学術集会の映像配信を現地開催とあわせて行っていくことで、子どもに関わる多くの看護職のみなさまと意思を一つにすることができると感じました。

参加者アンケートには会場の空調不良、案内の不備などのご指摘もあり、至らない点多々ありました。これらの反省点は次年度に引き継ぎ、よりパワーアップした学術集会となるよう微力ながらお手伝いできればと思っております。「多様化・複雑化する社会の中で生きる「子どもの力」を育む」をテーマに開催予定の第34回学術集会の加藤千子会長、企画委員のみなさま、どうぞよろしくお願いいたします。

最後に企画・運営にご助言いただいた理事のみなさま、公務もお忙しい中1年に渡る準備を共にしてくださった企画委員のみなさま、当日の運営を快くお手伝いいただいた運営委員のみなさま、その他ご協力をいただいたみなさまに心より感謝いたします。そして、子どもの未来について一緒に考える機会にご参加いただいたみなさま、本当にありがとうございました。この学術集会で感じた「ときめき」が糧になれば幸いです。



新理事会の紹介

理事長挨拶

今期、一般社団法人日本小児看護学会理事長を拝命いたしました野間口千香穂です。

2024年の幕開けは、1日の「令和6年能登半島地震」、2日の羽田空港航空機衝突事故と悲惨な災害や事故が相次ぎ、会員の皆様におかれましては、心を痛めていらっしゃると思います。被災地で今も困難の渦中にある方々に心よりお見舞い申し上げます。また、看護職として現地で活動をしている皆様におかれましても感謝申し上げます。

被災地での子どもの状況や支援に関する報道もたびたび取り上げられ、災害発生後早い時期から子どもたちの支援がなされていることに安堵すると同時に、本学会でも災害対策委員会を中心に情報収集しながら、必要な支援を検討していきたいと思います。

2023年6月から新理事体制としてスタートしました。既に各委員会が活発に活動を行っております。今期も諸先輩方が大切にしてくられた小児看護実践に貢献する学会活動を継続推進してまいります。これまでの事業を継続することはもちろん、多くの会員の皆様が学会活動に参画して、コミュニケーションが促進できるよう活動を進めていきたいと考え

ています。また、小児の療養環境の課題、専門看護師制度や認定看護師制度に関する議論など、昨今の課題についても小児看護の立場でタイムリーな議論や発信をするとともに、関係機関との連携や調整を図ってまいります。

本学会の目的である「子どもの健康増進に寄与する」学術団体としての社会的役割を果たしていくためには、全国の会員の皆様のご支援、ご協力が欠かせません。会員の皆様の実践、教育、研究活動の成果を学会誌や学術集会の機会を通して発信していただくとともに、本学会の活動を注視していただき、忌憚のないご意見をいただきたいと思います。子どもの健康増進に貢献する学会として、変化する社会の中で将来を見据えた法人運営に尽力してまいりますので、皆様の変わらぬご支援ご協力をお願い申し上げます。



● 一般社団法人日本小児看護学会 理事長 野間口 千香穂
(宮崎大学医学部看護学科 子育て世代・子ども健康看護科学講座 小児看護学領域)



総務委員会

総務委員会は、常設委員会との連携のもと、学会の運営業務の円滑化を図るために設けられています。主に、学会運営に必要な庶務、及び会計に関する事項、会員の入退会管理、各委員会との連絡・調整、外部関係機関との連携・交渉、理事会・社員総会・会員集会の運営等に従事し

- 委員長：野間口 千香穂
- 委員：平林 優子、三宅 玉恵、植木 慎悟、狩集 綾子、五反田 奈々、田代 恵理

ています。新メンバーは、宮崎、福岡、松本と離れていますが、学会の成果を社会に還元できるよう、そしてより健全な学会運営となるよう尽力して参ります。学会へのご要望や各種お問い合わせ等は、「一般社団法人日本小児看護学会事務局((株)毎日学術フォーラム内)」へご連絡下さい。

編集委員会

- 委員長：平林 優子
- 委員：有田 直子、小川 純子、小泉 麗、杉浦 太一、鈴木 千衣、新家 一輝、西垣 佳織、藤田 優一、山村 美枝、横山 由美、川田 悠介、小林 睦

編集委員会の主な仕事は「日本小児看護学会誌」の編集です。編集委員は、皆様からの論文投稿について査読・修正を経て公開に至るまでの一連の過程に関わっています。投稿から受理までのプロセスは「Editorial Manager®」というオンラインシステムを使用していますが、国際医学情報センターの専任編集事務局の方のサポートを受けて運営しています。論文投稿があると、編集事務局によりテクニカルチェックを受けます。担当編集委員が決まり、編集委員は論文に適切な2名の専任査読委員を選任し、査読が行われます。より質の高い、成果が読者に伝わりやすい論文となるように、編集委員も、査読者と投稿者の橋渡しとともに、編集としての独自の役割を担います。原則として2回（必要時は数回）の査読と修正を経て、論文が受理されますと、J-stageに年3回（3月、7月、11

月）論文がオンライン公開されます。また毎年12月末には冊子体の学会誌を発行していますが、これらの編集作業も委員会が担っています。

学会誌の査読はピアレビューです。投稿論文は増加傾向にあります、2023年現在209名と多くの専任査読者にご登録いただいています。

研究の倫理もより厳正・公正さが求められるようになり、適宜「投稿規程」「査読ガイドライン」の見直しもしています。利益相反も著者全員の報告が必要になりました。

学術集会では、多くの論文が掲載に至るよう情報提供を企画予定です。

本学会誌が小児看護の発展に寄与する多くの知見をもたらしますように、皆様の投稿をお待ちしています。

診療報酬検討委員会

- 委員長：萩原 綾子
- 委員：市原 真穂、河俣 あゆみ、鈴木 千琴、関根 弘子、福地 麻貴子、水野 芳子、山本 光映

診療報酬検討委員会は、主たる活動内容として、小児看護および小児医療に関して診療報酬等の経済的保障の面から、臨床や看護教育の現場に所属している委員が、看護領域だけでなく医学領域などの関係者とも協議し現状を改善していくための提案を行います。診療報酬は、2年ごとに改定されます。委員会では、現状の課題を調査検討し、それを要望書や提案書の形で看保連を通じて発信します。

また、診療報酬改定が発表されると同時にその評価を行い、次の改定

に向けた活動に取り組みます。

診療報酬については、研究活動などを通してエビデンスをもとに要望案を検討しています。委員会でもテーマを決めて研究活動に取り組んでいます。

この活動は、会員の皆様の現状に関するご意見が何よりの推進力になります。忌憚のないご意見、ご要望をお寄せ下さいますよう、お願いいたします。

小児看護政策委員会

- 委員長：荒木 暁子
- 委員：市原 真穂、及川 郁子、河上 智香、熊谷 智子、小林 瑞穂、佐藤 奈保、西田 みゆき

小児看護政策委員会は、2022年度から新メンバーとなり2期目を迎えました。

本委員会は、(1)健やか親子（第2次）に関する事項、(2)小児の養育環境、療養環境に関する事項、(3)小児看護教育制度のあり方に関する事項、(4)その他、小児看護政策に関する事項、を所掌しています。2022年に発出した提言「成人患者との混合病棟における子どもの療養環境向上のための具体的対策」は、第26回日本看護管理学会学術集会（福岡）、第53回日本看護学会学術集会（北海道、千葉）等で発表するなど伝播に努め、そ

の成果として令和6年度診療報酬改定における「一般病棟と一体的に運用する小児医療管理料3の見直し」につながりました。また、小児看護領域における高度実践看護の役割拡大にむけて、第32回、第33回小児看護学会学術集会テーマセッションで参加者とのディスカッションを通して方策を検討しています。

こども家庭庁の発足など、こどもへの支援に社会の目が向いているこの機を捉え、まだ充足されていないこどもと家族のニーズを把握して発信し、引き続き熱い想いで取り組んで参ります。

国際交流委員会

- 委員長：加藤 令子
- 委員：金泉 志保美、藤田 優一、本田 順子、名古屋 祐子、古藤 雄大

国際交流委員会は2023年7月から前期メンバー5名に古藤委員を加えた6名で活動しています。国際交流委員会の主な活動内容は、(1)Asia Pacific Paediatric Nurses Association (APPNA) およびWorld Academy of Nursing Science (WANS) での国際交流活動、(2)小児看護に関する国際学会の情報発信、(3)国際交流に関する事項の実施です。

2023年11月に開催した研修会「海外の最新の研究にふれよう！」では学会員を対象として、英語論文の検索方法、翻訳方法を紹介し、それらを用いて海外の介入研究や子どものQOLに関する英語論文を紹介しました。多くの会員に参加していただき、アンケートでも「今後の英語論文を

読む際に役立つ」という回答をいただいています。

今後の活動としては、若手研究者や実践家が研究や実践の成果を国外に発信して国際学会への参加・交流を促進できるように、第34回学術集会においてテーマセッションを実施したいと考えています。また、日本人の人口減少に伴い、今後、在留外国人や外国籍のこどもが増加し、益々こどもを取り巻く社会の多様化・複雑化が予測されます。今後の活動に向け、是非、会員の皆様からご意見やご要望をお寄せいただきたいと思います。本委員会へのご支援・ご協力をお願い致します。

学術・研究推進委員会

- 委員長：二宮 啓子
- 委員：内 正子、濱田 米紀、本田 順子、岡永 真由美、原 朱美、清水 千香

2023～2024年度の学術・研究推進委員会は、二宮啓子(委員長)、内正子、濱田米紀、本田順子、岡永真由美、原朱美、清水千香の7名で活動しています。

学術・研究推進委員会は、①会員を対象とした小児看護の実践・教育に関する調査・研究の助成、②学会誌に掲載された優れた論文のなかから研究奨励賞の選考、③学術集会の支援、④その他学術・研究推進に関する業務を担当しています。

第33回学術集会では、現地開催とオンデマンド配信を行い、荒木暁子会長のもと企画委員の皆様の工夫と努力により、1685名の参加者が得ら

れ、満足度の高い学術集会になりました。現在は、第34回学術集会の開催に向けて支援を行っています。並行して、2023年度研究奨励賞の選考も行っています。また、研究助成については、従来の「日本小児看護学会研究助成」、「川出富貴子国際発表助成」に加えて、2024年度から「大学院生に対する研究助成」が開始になります。応募締め切りは、2024年3月31日です。是非、ご応募ください。会員の皆様に応募して頂けるように広報活動を行って参ります。

子どもの健康増進、疾病予防、健康回復等に寄与できるよう、会員の皆様の実践・教育・研究を支援していきたいと思ひます。

広報委員会

- 委員長：渡邊 輝子
- 委員：川名 るり、新家 一輝、西垣 佳織、鈴木 千琴

広報委員会は、学会活動や成果物など、小児看護に関する様々な情報を学会の皆さまと共有すること、そして社会に発信していく役割を担っています。これらの活動が、小児看護の実践・研究・教育に、そして子どもと家族に寄与していくことを目標に取り組んでいきます。

学会誌バックナンバーや学会成果物・政策提言、小児看護スキルアップ研修(E-learning)など各委員会の研修のご案内、災害関連情報等をホー

ムページに掲載しておりますので、是非ご活用ください。

また、会員の皆様には、学術集会や研修会・地方会、助成金、選挙、ニュースレター等各委員会から寄せられます最新情報をメールマガジンにてご案内いたします。受信のご登録がまだの方はマイページにログインいただき、メール配信受領をご選択ください。会員の皆様とより密接に繋がり、学会が発展していくことを目指してまいります。

倫理委員会

- 委員長：平田 美佳
- 委員：井出 由美、入江 亘、笹木 忍、仁宮 真紀、古橋 知子、三輪 富士代、望月 浩江

倫理委員会委員長を拝命いたしました平田美佳です。歴代の倫理委員会の活動を引き継ぐとともに、新委員や会員の皆様とともに新しい活動を創造していきたいと考えています。活動を始めるにあたり、委員会のミッションとして下記を掲げました。

子どもたちが生活する家庭、病院、施設など、あらゆる場において、

『子どもの生活が最大限に守られ、安心して過ごせること』

『子どもが本来持つ力を最大限に発揮できるように支援されること』

『子どもにとっての最善の利益が追求されること』

具体的には、①看護職が子どもの声をしっかりと受け止め、そこに倫

理的課題があるのかわからないのかを見極めることのできる「倫理的感受性」を高めること、②看護職が「子どもの最善の利益」のためのアドボケーターとしての役割を自覚すること、③協働する多職種との「話し合い」の場を設け、「子どもを主語」にし、「子どものための発言」ができること、④倫理実践が難しい状況でも、自分のおかれた立場で今できることから始めていくことの達成をめざし、研修会の企画・運営、研究活動等を行ってまいります。委員会活動を通して、微力ながらあらゆる状況にある子どもと家族の幸福と福祉に貢献できるよう努めてまいります。

災害対策委員会

- 委員長：来生 奈巳子
- 委員：伊藤 久美、上原 章江、草野 淳子、小迫 幸恵、近藤 美和子、今野 美紀、菅原 淳、泊 祐子、西田 みゆき、野村 智実

災害対策委員会委員長を拝命しました来生奈巳子と申します。

東日本大震災を機に設置された災害対策委員会は、災害対策マニュアルとそれに基づくネットワークを構築するとともに、災害対応研修の開催、学術集会テーマセッションの開催、災害支援関連情報の収集と発信、災害支援事業に対する助成金の交付等を行ってまいりました。委員は全国8ブロックに在勤在住する評議員および災害時小児周産期リエゾン等の計11名で構成しています。

令和6年1月1日に発生した能登半島地震につきましては、発災直後より被災地に近い評議員および学会員と連絡をとり、状況を把握すると

もに、災害支援関連の情報提供を行いました。また、日本小児医療保健協議会(四者協)小児・周産期災害医療対策委員会においても被災地の小児・周産期医療の状況を情報共有しました。能登半島ではまだ多くの子どもと家族が避難生活を余儀なくされ、中長期的支援が必要です。今回の災害対応を通じて災害対策マニュアルの課題も見えてきました。大規模な自然災害が多い日本において学会が担うべき役割を改めて考える必要があると感じています。

皆様のご支援・ご協力をよろしくお願い致します。

教育委員会

教育委員会は、小児看護の基礎教育、および、継続教育の課題に関する事項を中心に活動しています。今期から新メンバーでの出発となりました。

小児看護の潮流を読み、会員のニーズをふまえつつ、現状にフィットした支援ができるよう、企画・運営していく所存です。会員の皆さまに直接還元できる活動を担っていますので、委員8名一丸となって真摯に取り組みたいと思います。中心的な活動は次の2点です。

(1) 人材養成スキルアップ研修の管理と企画・運営

「小児看護実践基盤(E-learning)」と「医療依存度の高い子どもと家族の

●委員長：西田 志穂

●委員：大島 誠、川名 るり、込山 洋美、佐藤 朝美、鈴木 征吾、西村 実希子、橋本 侑美

看護(E-learning + オンライン集合研修)」の2コースがあります。小児看護をとりまく状況の変化と、ケアの場の多様性が進む現状に対応する研修となっており、両コースの修了者はコンスタントに増えています。

(2) 若手教員に対する支援

前期より「語り場」と称して若手教員が集い、語り合える場を提供してきました。今期は、ここから一歩進めて、学び合える場となるように企画していく予定です。

皆さまには、これらを含む研修等の情報を随時お知らせいたしますので、ふるってご参加いただけますと幸いです。よろしくお願いいたします。

選挙管理委員会

選挙管理委員会は、公正かつ中立的な立場で、評議員選挙(4年毎、再認可、継続8年毎)、理事選挙(2年毎)に関わる事項について、学会事務局と協働して、選挙管理・執行をしています。本委員会の任期は他委員会と異なり4年で、2023年度から2026年度までです。

2024年度は、評議員選挙・理事選挙があります。評議員は全国8地区から50名程が選ばれ、理事は評議員の中から投票により選出されます。理事・評議員は、会員の代表として、本学会の発展のために委員会を構

●委員長：西田 みゆき

●委員：小野 智美、関森 みゆき、田中 美央、近藤 美和子、林 亮

成して活躍されています。

これまでの選挙では投票率が低いことが問題となっております。会員2年目以上であれば、選挙権があります。選挙には、会員番号とIDが必要です。ご自身の番号を控えておくことをお勧めします。ホームページ、メール、葉書きなどお知らせいたしますので、是非とも選挙への参加をお願い申し上げます。



研究奨励賞受賞者より

●長谷 美智子(東京女子医科大学)、櫻井 育穂、辻本 健、瀧田 浩平(埼玉県立大学)、添田 啓子(元埼玉県立大学)

このたびは日本小児看護学会研究奨励賞をいただきまして誠にありがとうございました。調査研究、査読、論文掲載、賞の選考に関わってくださった皆様に心より感謝致します。

この研究はオレムセルフケア理論を基盤とし、入院中の「子どものセルフケア能力・親のケア能力を高める看護尺度」を開発することを目的に、小児専門病院に入院していた子どもを育てている家族を対象に質問紙調査を実施し、信頼性と妥当性を検証したものです。最終的には17項目3因子となり簡便に子どものセルフケア能力・親のケア能力を高める看護の実践状況を測定することができるようになりました。皆様に尺度をお使いいただきたいと思います、この場をお借りして尺度の紹介をさせていただきます。大切に存じます。

第1因子は「親がケアを行うための看護」で、説明したり手順を共に考えたり環境を整えたりすることで親が子どものケアを実施できるようにする支援で構成されています。質問項目は、「自分たちが子どもの世話をしやすいように、自分たちに合わせた手順を考えてくれた」「子どもへの接し方を教えてくれた」「子どものためにできることを一緒に考えてくれた」「看護師の行っていることについて必要性や意味を説明してくれた」「自分と子ども以外の家族のことも気にかけてくれた」「子どもが「できたこと」をともに喜んでくれた」など8項目です。

第2因子は「子どもの意志を尊重する看護」で、可能な限り子どもも治療やケアに主体的に参加できるようにする支援で構成されています。質問項目は、「子どもにもわかるように説明してくれた」「子どもの状況を適確にとらえられるようにわかりやすく子どもに聞いてくれた」「子どもが自分でできるよう工夫してくれた」「子どもの興味や好きなことに合わせて選択肢を用意してくれた」の4項目です。すべての質問項目の主語が「子ども」であることが特徴です。

第3因子は「親が継続してケアできる力を養う看護」で、子どもや家族の気持ちに寄り添いながら子どもの状態に合わせたケアの提供や、スタッフ間で統一したケアを親に教えていくことで、親が継続してケアできる力を養うことを目指す支援で構成されています。質問項目は、「看護師から

教えられた世話の方法は統一されていた」「子どもの世話がしやすいような環境づくりをしてくれた」「子どもや家族の気持ちに寄り添ってくれた」「子どもの状態に合わせて世話の方法を変更してくれた」など5項目です。

これらの質問項目は入院中の子どもたちに日常的に提供している看護ですが、「当たり前の看護」として行われているかもしれません。尺度の項目を意識して使用することで、「子どものセルフケア能力・親のケア能力」をより高める看護につながると考えます。

さらに、尺度を使用して看護の受け手である家族にどの程度届いているのか評価していただきたいと思います。退院が具体的に見えてきたころや退院の際に使用いただき、入院中の看護の振り返りや退院指導計画にご活用いただければ幸いです。

小児看護に携わる看護職が提供しているひとつひとつの看護が、「子どものセルフケア能力・親のケア能力を高める看護」であり、「子どものセルフケア能力・親のケア能力」の向上になくてはならないものであるという根拠を示していくことが、小児看護実践の評価につながると考えています。「子どものセルフケアを補完する親のケア能力を測定する尺度」も、先日発刊された日本小児看護学会誌(vol.32)に掲載されました。2つの尺度を皆さまに活用していただき、成果を研究としてまとめていただくことでさらに精練できたらありがたく存じます。



恩師、川出富貴子先生に感謝を込めて

● 金城学院大学看護学部 鍵小野 美和

川出富貴子先生のご逝去を悼み、謹んでお悔やみ申し上げますとともに、心からご冥福をお祈りいたします。

私が川出先生とお会いすることになったのは、約20年前に愛知医科大学看護学部の小児看護学助手として入職したことがきっかけであります。当時の愛知医科大学は新設3年目を迎えるころだったと記憶しています。そして、当時の小児看護学領域の教授が川出富貴子先生でした。はじめての教育職で緊張する日々でしたが、川出先生とお話しをすると自然と気持ちが和らぎ、心地よい時間へと変化するのを感じたものです。先生のご講義やゼミをはじめ、川出先生が研究されていたシュタイナー教育等について主催された研究会、研修会、ご自宅での勉強会にも参加させていただきました。川出先生が川崎医療福祉大学大学院(博士課程)に異動された後は指導教員と院生という関係でシュタイナー教育を基盤とした研究のご指導をいただきました。困難な道のりではありましたが、いつも包み込むような愛情のあるお言葉、励ましをいただき、感謝の念に堪えません。また、すべての現象を俯瞰的にとらえ、感謝するその人となりには尊敬の念が尽きません。川出先生との出会いは、私の人生に大きな影響を与えてくださいました。

川出先生は、これまで三重県立看護大学や愛知医科大学等の名誉教授、そして、本学会の名誉会員として、小児看護の発展に多大なる貢献をされてきました。先生の子どもたちをみるそのまなざしは、子どもたちの健やかな育ち、安寧、ひいては世界中の子どもたちの平和をこころから祈るものでした。そのために、常に時間と情熱を惜しみなく注がれておられました。

また、先生は人間性の探究に高い意識をお持ちでした。常に自己研鑽をも積み、ご自身の精神性を高めていらっしゃいました。先見の明で科学万能の時代における、人間を対象とする看護について、科学では解明されていない無意識の世界の重要性に意識を向けられ、より精神性の高い看護者による全人的アプローチの必要性をライフワークとして追究され、「医療における魂および霊性探求プロジェクト」を立ち上げられました。本年三月には、先生のご意思を継ぐ方々により第三回研究会が開催される予定になっています。

これからも川出先生の教えを受けた多くの方々が先生の意思を繋いで看護の発展に寄与することを祈念申し上げまして追悼の辞とさせていただきます。



「リレートーク」 ● 西角 一恵 さん

バトンを渡して下さった佐野美香さんありがとうございます。

自己紹介

神奈川県立こども医療センターの副院長兼看護局長を拝命し4年になります。新卒で神奈川県立こども医療センターに入職し、看護師人生のうち、38年間は小児医療の臨床現場です。神奈川県立こども医療センターでは、医療安全管理者や地域医療連携室長も経験し、外から看護局を見た経験は、看護管理者としての今の自分の糧になっています。

看護師になったきっかけ

こどもの頃から母親が病気がちだったために医療が身近にありました。また、年の離れたきょうだいの面倒をみる中で、こどもの成長・発達のすごさを感じ、医療と子どもに関わる仕事という小児看護を目指しました。

新人時代の思い出

神奈川県立衛生短期大学(瀬谷美子先生に小児看護を学びました)を卒業後、初めて配属されたのは幼児内科病棟でした。3分の2が小児がんの子ども達、その他、神経疾患や染色体異常、先天性代謝異常等の子ども達が入院している病棟でした。当時、当センターでの骨髄移植が開始されたばかりでした。当時は本当に辛い治療で、また今ほどの治療成績も望めず、それでも懸命に治療に向き合う子ども達をみて、色々な葛藤があったことを思い出します。

新人の頃の忘れられない経験があります。新人誰もが強い緊張を感じてしまう厳しい先輩がいましたが、初めてのエンゼルケアにその先輩が付いてくれることになりました。その先輩はエンゼルケアの前に、亡くなられたお子さんに「この看護師さんは慣れていないけど、きっと良い看護師さんになるから、ケアをさせてあげてね」と声を掛けてくれました。その言葉を聞き、「患者さんの尊厳」と「私たちは患者さんから学ばせてもらって看護師になるんだ」ということを強く感じ、涙がポロポロこぼれました。この経験は、その後の看護師としての私の心構えの基盤になりました。

入職6年目には、神奈川県立看護教育大学校の小児看護課程で6か月間学びました。1か月におよぶ贅沢な実習では、こども側から看護師を見る

貴重な体験をし、この課程での学びが小児看護への思いをより強くしてくれました。

小児看護の魅力

外来配属時は、辛い治療を乗り越えた小児がんのサバイバーが成人になっても定職につけずにいる現状や、病識が持てず離職してしまう先天性心疾患の成人になった患者、病気のきょうだいのために親の手助けを懸命にしていたきょうだい児が思春期になり悲しい選択をしてしまったこと、高度急性期治療中、退院を熱望していた両親が入院が長期化することで疎遠になってしまうこと等を経験しました。成人移行期支援や在宅医療支援等の取組みは、このような経験が基盤になりました。小児専門病院の「治す医療」と「支える医療」の重要性を子どもと家族から教えてもらったと思います。

小児期発症の疾患は、身体的・精神的・社会的な機能を獲得する前に、疾患や障害を持つことになります。また家族も発達段階の初期にあるため、十分力が発揮できない状況にあります。でも、子どもと家族は大きな力を持っています。

子どもと家族の力を信じ、看護専門職として可能性に働きかけることができるのが小児看護の魅力です。

ストレス解消法

休日は、自分を甘やかす(ダラダラ過ごしても自分を許す!)。

後輩たちに期待すること

子どもと家族の、これまでの歩みもこれからの将来も慮れる看護師であって欲しいと思います。医療が急速に進歩する中、それに伴い看護が何をすべきかを、常に小児看護の仲間と共に考え続けていきたいと思います。

バトンを受けて欲しい人

日本小児総合医療施設協議会等と共に活動している埼玉県立小児医療センターの中田尚子さんにお願いします。



日本小児看護学会第34回学術集会に向けて

● 学術集会長 加藤 令子 (関西医科大学看護学部・大学院看護学研究科)

日本小児看護学会第34回学術集会を2024年7月6日(土)・7日(日)の2日間、大阪国際会議場で開催させていただくことになりました。今回、第34回目の学術集会で初めての大阪府開催となり、オンデマンドでの開催も予定いたしております。

本学術集会のテーマは、「多様化・複雑化する社会の中で生きる“こどもの力”を育む」と致しました。

2022年に「こども基本法」が制定され、また、“こどもまんなか”をスローガンに2023年4月にこども家庭庁が発足し、こどもを主体とした考え方・かかわりの重要性が社会で謳われています。しかし、未だ医療の場では、こどもの主体性を尊重したかかわりが浸透していない現状があります。こどもに行われることへのこども自身への説明・伝えることのあり方、入院生活を送るこどもの日常生活の選択権など、私達がこどもを主体とした医療について再度見直し、真剣に取り組む必要があります。

また、貧困、虐待、ヤングケアラー、宗教二世、トランスジェンダーなど、こどもを取り巻く社会も多様化・複雑化しています。さらに2023年4月26日、厚生労働省の国立社会保障・人口問題研究所が発表した長期の人口動向を示す将来推計人口によると、日本の少子化は進み、2038年には出生数が70万人を下回り、70年には45万人まで減る見通しです。2070年の総人口は今の7割の8700万人まで減少し1割は外国人となり、その割合は現在の5倍となる見込みです。そのため、年々、外国にルーツをもつこどもが増加し、益々こどもを取り巻く社会の多様化・複雑化が予測されます。

このような社会の中で、こどもが自分のもつ力や権利を理解し、自分の置かれた状況に主体的に向き合う力を育み、幸せに健やかに成長発達することを目指し、私達が今、取り組まなければならないこと、将来を見据えて準備を進めなければならないことを本学術集会で考えてまいりたいと思います。

特別講演2題は国際化を視野にいたした演題と致しました。特別講演1「Transcultural Nursing Care of Children and their Families: Experiences from USA」はZOOM(日本語字幕)での講演となります。講師のCheryl Leuning氏は、米国ミネソタ州ミネアポリスにあるAugsburg Universityの名誉教授であり、2007～2008年にはInternational Transcultural Nursing Society (TCNS)の会長を務め、Leininger賞を受賞されています。多民族国家の米国で学問領域として認められているTranscultural Nursing Careの概要および、米国での小児看護の現状についてご講演いただきます。特別講演2「地球市民としての子どもたち：国境を超えた多様性・公平性・包摂」の講師 中村康秀氏は日本の母子健康手帳を世界に広げた方です。現在、日本WHO協会理事長に就任されており、これまでの活動からDEI (Diversity, Equity and Inclusion) の発想についてご講演いただく予定です。

教育講演2題は、様々な背景をもつこどもを理解していただくため、教育講演1は「不登校に合併する起立性調節障害の理解と運動療法・機器の開発」について石崎優子氏(関西医科大学小児科学講座)、教育講演2「多様な性の子どもたち」は佐々木掌子氏(明治大学文学部)に、ご講演いただきます。

本学会では、英語セッション(口演・示説)を設けることに致しました。学術集会長を務めさせていただきます加藤が、日本小児看護学会国際交流委員長を拝命しており、国内での素晴らしい研究内容を今後は国際学会で多く発表頂きたいと考え、その準備段階として本学術集会を活用いただきたいと思います。

開催まで半年となり、企画委員一同、多くの皆様にご参加いただけるよう準備を進めております。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

**多様化・複雑化する社会の中で
生きる“こどもの力”を育む**

会期: **2024年7月6日(土)～7日(日)**

会長: **加藤 令子**
(関西医科大学看護学部・看護学研究科こども看護学教授)

会場: **大阪国際会議場**



演題募集期間 2023.12.1^金～2024.2.12^月

事前参加登録期間 2024.2.1^木～5.31^金

後期参加登録期間 2024.6.19^水～9.30^月

オンデマンド期間 2024.7.19^金～10.31^木

一般社団法人日本小児看護学会では、会員様にメールマガジンをお届けしております。学会や研修会のお知らせや、助成金の公募案内など最新情報を配信しております。

ご登録されていない方は、是非下記URLもしくはQRコードより「メールマガジンの配信登録」をお願いいたします。

<https://jschn.or.jp/email-magazine/>



広報委員会メンバー

● 委員長：渡邊輝子 ● 委員：川名るり、新家一輝(第62号編集長)、西垣佳織、鈴木千琴